傾向を示し，胃腸疾患が6割～8割。入院者総数255名，手術例237名，手術施行率は93%である。そのうち食道噴門癌11例，胃切110例となつている。悪性腫瘍の手術例は全手術例の25.7%を示す。胃癌について見れば B-I 法24例，B-II 法3例，胃腸吻合術8例，試験開腹1例である。

全症例中2，3の興味ある症例について

年令別では85才のイレウスの症例について，手術所見はポリープに依る腸重積と大網膜の絞扼性イレウスの併発した形であつた。

小児外科の分野においてはヒルシュシュプルング氏病の症例について，共に全治退院す。

胃切110例中ポリープ3例の症例について，

最後に消化性空腸潰瘍が当地区にあつても多くそのうち6例について B-II→B-I 再建術を施行したのでその全症例について発表した。

51. 胃軸捻転症を伴える横隔膜ヘルニヤの1治験例

長狭国保病院　山田明義，石島福昭

症　例　30才，男子，職業　運転手

既往歴　特記すべきものなし

現病歴　約5年前より，心窩部痛，胸やけ等を訴え，その都度，薬物療法をうけ軽快していたが，自動車運転中，前胸部激痛，嘔吐等現れ，ショックの状態にて来院，諸種検査にては軽度の貧血と潜血の認められるのみ，レ線検査にて，右食道裂孔ヘルニヤの嵌頓と診断し手術を施行す。

手術所見　上正中切開にて開腹するに胃は胃周囲臓器と癒着し，そのため大彎側は後正中方向に索引され，長軸に対し，左方向に捻転せる状態にて，食道裂孔より右縦隔内に脱出していた。癒着のため，さらに右第6肋間にて開胸し，還納，噴門部を固定した。

術後経過　順調なるも約3カ月より胃部膨満感等現る。レ線的にバリウムの排出遅く迷走神経切断せるためと思はれる。11カ月後には自覚的苦痛はほぼ消失す。

52. 佐伯病院における最近2年間の胆道系疾患手術の統計的観察

佐伯一善

金沢市，佐伯病院における，昭和35年11月より昭和37年10月に至る満2年間の全手術例は1563例であり，その中，胆道系疾患は99例，6.6%であつた。その分類は，胆石症，胆嚢炎，回虫迷入が90例で圧倒的で，以下膵頭部癌3例，胃癌浸潤に因る総胆管狭窄症2例，胆嚢癌1例等である。手術々式は，胆嚢剔出術69例，胆嚢剔出兼総胆管切開術14例，総胆管切開術4例，胆道再建術10例，膵頭部十二指腸切除術1例等となつている。この間の死亡例は，胆石症手術後6日目に急性心筋障碍で失つた1例である。これら胆道系疾患99例の中には，6例の再発による総胆管結石症があるが，これを検討すると先回手術時の遺残結石より胆管内にて再形成されたものが多い。また結石は何れもビリルビン系石であり，総胆管開口部の狭窄は必ずしも認められなかつた。特にビリルビン系石が胆管内にて原発せる症例には再発の率が高いので充分の後療法が必要であると考えられる。

53. 植竹病院勤務半年間の経験症例

植竹病院　前田和嘉一，植竹光一

植竹病院における最近半年間の手術例は181例であるが，その中興味ある症例について報告した。181例中胃切除は106例であるが，大部分は胃十二指腸潰瘍で，胃癌は健康診断の目的で来院した中から発見された早期癌2例を含む13例であつた。胃切除術後障碍患者は半年間に16例あつたが，この中十二指腸虫の寄生によるもの5例あり，徹底的駆虫によつて治癒せしめ得た。術後愁訴のアンケート作製には寄生虫障碍を十分考慮すべきである。次に，他病院で虫垂切除後癒着を疑われた15才の男子の狭窄期回腸末端炎の1例，および50才の女性で癒着性イレウスとして開腹した処，結核性包裏性腹膜であつた症例につき報告した。181例中手術死亡は胆石症の50才の女性1例である。不顕性バセドウ氏病の疑いあるも胆石症状激烈のため手術を施行した処，高熱頻脈を起し術後3日目で急死したが，手術適応の難しさを痛感した。

54. Poor Risk の胃切除について

上都賀病院外科　坂田早苗，石崎省吾
船越文雄，根本幸一
最上栄蔵，真家雅彦

最近3年間に249例の胃切除を行い，89例の Poor Risk の患者に遭遇した。

われわれの Poor Risk の基準は，アメリカ麻酔学会，東大・山村，千大・矢沢等の基準を参考にして，年令65才以上，血色素量70%以下，赤血球数

350万以下，ヘマトクリット35%以下，血清蛋白6.0 g/dl以下，B. S. P 10%以上(30分値)，Gros反応1.24 cc以下，EKG中等度障碍，最高血圧値180 mmHg以上，Keith-Wagner II_b以上，P. S. P 50%/1時間以下，尿蛋白(卄)以上，肺活量1500 cc以下，または喘息，結核等の肺合併症のあるもの，その他重篤な全身症状あるもの，とした。

249例中，手術死亡の3例は，全て Poor-Risk 例であつた。これらの経験より，われわれは，中山式胃切除術によれば，手術侵襲を少くすることが出来るので，Poor Risk の患者に対して，術前術後の管理を十二分にすれば，手術適応をさらに拡大出来ると信ずる。

55. 岩井病院外科の年間報告および十二指腸閉塞症の1治験例

岩井病院外科　福田　陽，酒井幹雄
鈴木博孝

岩井病院外科の現況ならびに十二指腸閉塞症の1治験例を報告した。

岩井病院外科外来の患者延数は，昭和36年度に比し昭和37年度は約41%の増加，入院患者数は前年度に比して約31%の増加である。外科手術の総数は約40%増加している。また，胃腸科の患者1000人の主訴をみると疼痛が最も多く半数を占めており，胃症状が発現してから診療を受けるまでの期間を調べると，1カ月以内に受診しているものは約45%であることを知つた。これらのほとんど全部に胃レ線検査および胃液検査を行ない，その約20%に胃カメラを施行している。現在までの胃疾患での開腹術は150例で，その81.8%に中山式胃切除術を施行している。

症例は，26才の男子，主訴，嘔吐，腹痛，レ線的に胃下垂および十二指腸うつ滞を証明，開腹してみるに，トライツ靱帯の部分のリンパ腺が拇指頭大に腫脹また腸間膜根部が下に牽引されており，腸間膜動脈性十二指腸閉塞症と判明，結腸後十二指腸空腸吻合術を施行し，術後10日で全治退院した症例である。

56. 新らしい集団検診用ガストロカメラ P 型の使用経験について

中山癌研　柏木　登，長崎　進

中山癌研では会員を6カ月ごとに定期検診して，癌の早期発見を期しているが，胃については，レ線検査前に集団検診用P型ガストロカメラによる検査を行なつている。P型カメラは従来のV型カメラを細くするため，出来るだけ簡素化したものである。これを前処置なしに坐位で挿入し，背位にて幽門部より噴門側にかけ撮影を行なう。現在迄，約50例に施行したが，内40例に診断的に有効な写真を得ることが出来た。実際このカメラによつて胃潰瘍および胃癌の患者を発見した。P型カメラの利点は，患者に与える苦痛の少ない事，および短時間の内に施行出来ることである。P型カメラは詳細な病変を検討する目的には従来のカメラに劣るが，スクリーニング用としては十分価値があり，さらに撮影技術とカメラの構造の改良を図るならば，従来のカメラと違つた独自の特色が発揮出来るものと考える。

57. 中　止

58. 難治性特発性脱疽を頸腺摘出術にて治癒せしめたる1症例

県立東金病院　横田俊二，大塚清蔵

患者は31才の男性，職業は農業，4，5年前より両下肢に冷感を訴え，約6カ月前より左第I趾に脱疽性の癰疽を訴えて，当科にて，内科的姑息療法，クライスリン，カリキュレン，抗生物質等で，一時治ゆせるも，最近，他医にて治療中，脱疽悪化，今回の入院時には，両下肢に浮腫，ならびに左足第I，II，III趾脱疽および蜂カ織炎認められ，姑息的にては治癒し難く，下肢切断も二次感染と浮腫のため出来ず，左側頸腺摘出術を決行。術日の夜より，術前44 cm 周囲径ありし下肢も，42 cm，40 cm，38 cmと浮腫は日々減少し，蜂カ織炎も軽快。特に左足の潰瘍と壊死巣が新肉芽組織にて治ゆし始める。また除痛効果が著明に認められ，夜間の睡眠障害も全く去る手術成績が得られた。頸摘後2週間にて左下肢下位切断，脱疽は完全治ゆす。

59. 噴門潰瘍および S 字状結腸癌の手術小経験について

伊賀病院　高橋　康，伊賀多朗

症例1. 女○，♀，59才，左背痛胃部不快感を訴えて昭37. 9. 22来院。

胃X線検査により噴門部後壁中央にニッシエを認める。噴門潰瘍の診断の下，9. 24手術。B II 式胃亜全剔を行なう。潰瘍は噴門近い後壁に存し，膵下縁に近く穿通していた。術後経過は順調で3週後退院。